

人間を照らす光

岩河敏宏

聖書：ヨハネによる福音書1章1節～5節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。(下線部；筆者)

“初めに”は、創世記の冒頭『初めに、神は天地を創造された。』(1章1節)が強く意識され、神が「光あれ」と言われた時に、初めて天地創造が始まったのだから、言はあらゆる被造物が造られるよりも前にあり、創造以前に存在していた。言は被造物ではないので、神に属する存在であり、神と本質的に等しく(1節)、言は創造者なる神と共に働き(2節)、万物を成らせるとの主張です。そのことが、「万物は言(ロゴスであるキリスト)によって成った」に続き、「言によらずに成ったものは何一つなかった」(3節)という否定形で繰り返すことで、強調されています。言が神と同質・共同の関係にあることを踏まえ、言に命があり、この命は人の光だ(4節)と展開していますが、ここも創世記の「光あれ」を

意識した記述です。私たちの利己的な貪欲は、際限なく拡大して、隣人・隣国の存在や境界をも越える事態になっています。それでも、自国の権利や利益を優先させ、紛争解決に向けた有効な手段を講じることが出来ずに、混沌と闇がより深くなっていることを強く感じます。

この現実を「地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにある。」(口語訳2節)と聖書は記し、これに対して神が発した最初の言葉が「光あれ」なのです。この言葉を起点として、神の秩序が創造されたことを創世記は記しています。この「光」がヨハネ福音書では、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」(4節)と表現し、神の意志がイエスに継承されていることを証ししています。そのことは、地に蔓延する混沌と闇に対する神の意志が、今もなお働いていることを現しています。神は、「人の悪の故に生き物を打つことは二度としない、とご自身に誓われた」(創世記8章21節)ので人を処断するという手段は選ばず、イエスを世の光として遣わしたのです。彼の生涯は、人間的な価値観の中で小さくされた者や疎外された者が、社会との繋がりを回復する道を示し、罪の中にある者を執り成す歩みで、「人間を照らす光」です。私たちは、「光の子として歩みなさい」(エフェソ5章8節)との期待を受けています。新しい1年の歩みの中で、各自の仕方でチャレンジしてみましょう。